

ボランティアと私

— 何かを求めて —

◆知的障害者支援◆

法学部4年 橋本浩紀さん

日本最古の知的障害者施設で
「一緒に遊ぶ感じ」でボランティア

JR南武線矢川駅から歩いて約10分にある社会福祉法人『滝乃川学園』（国立市谷保）は、1891年（明治24年）創立の日本最古の知的障害者のための社会福祉施設だ。社会福祉サークル『青い鳥』に所属する法学部4年の橋本浩紀さんは、その滝乃川学園でサークルの仲間と一緒にボランティア活動を行っている。

学園では、5歳から23歳の幅広い年代の知的障害者が生活している。橋本さんは、そういう人たちと「一緒に散歩をしたり、ドライブをしたり。ジャニーズが好きな女の子とは一緒にジャニーズの踊りをします。ボランティアをしている、というより、一緒になって遊んでいるという感じです」

という。

年末のクリスマスは、一年の中でも最も楽しい一日になる。サークルで出し物を企画し、歌を歌ったり、ビンゴゲームをしたりする。国立市の主催で行われる知的障害者の方が集まって行うダンスパーティーの設営の手伝いをすることもあるそうで、ボランティア活動の内容はさまざまだ。

中学で出会った大学生がきっかけ 高校で初のボラでサッカー教える

橋本さんがボランティアをしようと思ったのは、「中学でサッカー部に入っていた時、ボランティアでサッカーを教えにきていた大学生に出会ったのがきっかけ」になった。その大学生は、中学生



いつも笑顔の素敵な橋本さん

だった橋本さんたちに真剣に向き合い、叱るときはしっかりと叱ってくれた。「尊敬できる人。でも、なぜボランティアで、ここまで熱くなれるのだろうと思った」という。

高校に入り、頑張っていたサッカー部を家の事情で辞めることになったとき、コーチに「中学校でサッカーをボランティアで教えてみないか？」と勧めら、中学で出会った大学生を思い浮かべ、快諾した。

それが初めてのボランティアだった。サッカーを教える、「ありがとう」と喜んで笑ってくれた中学生を見て、「初めて、自分は人の笑顔を見るのが好きなんだと思ったんです」と振り返る。



一緒にブランコで遊ぶ橋本さん

サッカー指導のボランティアをきっかけに、他のボランティアにも興味を持ち始めた橋本さんは、

「自分がしてあげることよりも、逆にもらっているものの方が大きいんです。みんなの笑顔を見ることで、日頃の生活を頑張れる」と、ますますボ

ランティアに惹かれていった。

ボランティアを始めた頃は、「ボランティア」

「偽善者」に感じ、葛藤した時期も
「させてもらっているんだよ」の一言

という言葉にとらわれ過ぎることもあったという。「自分のことを偽善者のように感じて、葛藤した時期もありました」。

しかし、ボランティアのことで悩むたびに、老人ホームの人の「ボランティアは、してあげているものではない。させてもらっているんだよ」という言葉や、高校時代の先生の「ボランティアが自己満足に繋がっていると、それが人の為になっているなら良いじゃないか」という言葉に救われた。

「たとえば偽善者のように思われても、それが人の役に立っているなら良いんじゃないか、とある意味開き直れたんです。自分が楽しいから、ボランティアを続けられている。これからも子供たちの笑顔を見たいので、続けて行き

たいです」

接して知り、憐れみ偏見なくす
これからは海外ボランティアも

橋本さんが、初めて知的障害者と接するボランティアに参加しようと思ったのは、大学でサークルの『青い鳥』に入ってからだ。「高校時代は知的障害者と関われる機会が無かったので、大学では関わってみたいと思いました」という。

知的障害者と接することで、知的障害者に対して持っているかもしれない憐みや偏見をなくしたいという気持ちがあったそうだ。初めて接した時は、戸惑うことも多かったという。自閉症の人に、何度も無視されたこともあった。

「始めはくじけそうだったけれど、何度も施設に通ううちに、だんだん相手の子も慣れてくれました。3か月後、初めて『橋本さん』と笑顔で呼んでもらえた時が、一番印象に残っています」と笑って答えてくれた。

「これからは、海外ボランティアもしてみたいと思っています。特に子供が好きなので、海外の教育支援に関わっていきたいです」と、橋本さんはこれからもボランティアを通じて何かを求めていく。

(学生記者 西野美雪 法学部3年)